

「おVだ」「おVである」に関する一考察

山田 敏 弘

1. 問題のありか

日本語において、敬語的表現を表す一形態に「おVだ」「おVである」という形態が存在する。この形態には、いろいろな制限があり、すべての動詞がこの形態を取れるわけではないようである。

- (1) a. ?組長はもう3人お殺しだ。
b. 組長はもう3人お殺しになられている。
- (2) *国原先生はテレビでニュースをお見だ。
- (3) ?矢野先生はAがあまり勉強しないのでおおこりだ。

これらはすべて異なる要因によって規定されていると考えられる。たとえば(2)は、よく言われていることであり、いまさら述べるまでもないが、「見る」という動詞が、一音節の母音語幹であるためである。(類例「似る」「着る」etc.)^[1] また(3)は、敬語の要素である「お～」と語幹の第一音節である「お」が母音衝突を起こしているためと考えられる。^[2] これら(2)、(3)のような音声的な要因では、(1. a)の例は説明できない。では一体(1)のような例が、多くの日本語の話者によって受け入れられないのはなぜだろうか。^[3]

本稿では、それを解く手掛かりとして、他動詞の場合にかぎり、日本語の話者の意識調査を交え、この敬語形態「おVだ」「おVである」について、どのような使用上の制限があるのかを、他動性、特に、その動詞の持つ目的語に対する動作の及ぶ度合いの強さと、それに付随する、動詞の動作性・点性の観点から、見ていくこととする。^[4]

2. 動詞の意味の面からの考察

第1章でも述べた通り、今回の考察の対象を他動詞に限定し、自動詞を排除したのは、自動詞の主語は、敬意が払われる場合、敬意が払われる人のからだの部分や抽象的付属物になることが多く、敬意を払われる人との、精神的・物理的近さという要素が入ってくるため、分析が困難になるからである。(この問題については、角田 (forthcoming) を参照) 動詞を他動詞に限定して考えた場合、相手に動作が決定的におよぶ動詞は、「おVだ」「おVである」の形態を取りにくいことが分かる。

- (4) ?落合選手は、ホームランを30本お打ちだ。
- (5) ?角田先生は、いま、庭で古くなった犬ごやをおこわしだ。
- (6) *組長は、へまをやった組員の腹をドスでお刺しだ。
- (7) *組長は、もう3人お殺しだ。= (1)

「殺す」や「刺す」のような「相手を傷つける」という意味を持つ動詞は、敬意を払われる人の行為としては、似つかわしくなく、そのため、これらの動詞が、敬語と共起することが制限されるのではないか、という仮設も一見成り立ちそうではあるが、「おVだ」「おVである」と類似の形態である「おVになっている」「おVになられている」とすると、非文ではなくなる、もしくはより受け入れられるようになる。

- (8) 落合選手は、ホームランを30本お打ちになっている。
- (9) 角田先生は、いま、庭で古くなった犬ごやをおこわしになっている。
- (10) ?組長は、へまをやった組員の腹をドスでお刺しになっている。
- (11) 組長は、もう3人お殺しになっている。

それでは、「おVだ」「おVである」の形態になるか、ならないかを規定するものは、上で述べたように、動作が相手におよぶ度合いに関係していると考えられる。

以下、動作が相手におよぶ度合いという観点から、考察を試みる。

2.1. 角田の動詞の階層との関連

角田(1982)では、日本語動詞を、相手に動作がどの程度及ぶかという観点から8つの類に分類している。これらは単に、意味の面から分類されたのではなく、これらの動詞が、類型論的な観察から得られた「対格の目的語は、他の斜格の目的語よりも、述語の示す動作が、及ぶ度合いが強い」という結論を考慮し、どんな格をその項に持つか、という点にも注意して分類されている。

以下、角田(1982: 197-198)の動詞の分類を挙げる。

表1

類	意	味	例
1	対象におよぶ動作		殺す, こわす, 打つ, 刺す; 食べる, 飲む
2	知	覚	見る, 聞く, 発見する, 嗅ぐ
3	追	求	待つ, 捜す
4	言	語	語る, 話す, 尋ねる
5	知	識	分かる, 知る, 忘れる
6	感	情	愛す, 好む, 望む, 恐れる, 怒る
7	所	有	所有する
8	能	力	できる

角田(1985)では、第1類、第2類について、さらに2つの下位分類をおこなっている。このうち第2類については、日本語では2つに分けることは困難であるため、分けられていないが、第1類については、日本語動詞に関しても、動作の結果が残るもの(「殺す」「こわす」「打つ」「刺す」)、動作の結果が残らないもの(「食べる」「飲む」)という下位分類をおこなっているため、以下この分類に従う。(前者を1A、後者を1Bとした角田の用語を用いる。)

第1章で示した音声的な規定要因を、もう一度ここで整理しておく。なお、ここで示す各規定要因は「おVだ」「おVである」以外の「お～」の敬語形態を規定するものである。以下に示した規定要因に該当するものは「おVだ」「おVである」の形態にならない。

規定要因1 語幹が1音節の母音語幹である

規定要因2 語幹が漢語であるサ変動詞

規定要因3 語幹が「お」ではじまる^[5]

これらの規定要因のフィルターにかけて、残った動詞を、まとめると以下のようになる。

表2

類	残った動詞
1 A	殺す, こわす, 打つ, 刺す
1 B	食べる, 飲む
2	聞く, 嗅ぐ
3	待つ, 捜す
4	語る, 話す, 尋ねる
5	分かる, 知る, 忘れる
6	好む, 望む, (怒る)
7	(持つ)
8	できる

第7類については、角田の動詞の階層には「所有する」しかないため、フィルターにかけた段階で、1つも残らないため、類似の意味を持つ「持つ」で、代用させる。また「怒る」については「いかる」と読むこととする。

表2の動詞のそれぞれについて、「おVだ」「おVである」という形態をとるか、取らないかを、以下、実験結果を交えながら見ていくことにする。

2.2. 日本語話者の「おVだ」「おVである」型敬語の使用の意識調査の分析

2.1. で挙げた各動詞について、日本語の話者が、どの程度の許容範囲において、「おVだ」「おVである」という形態にあてはめられるかという調査を行った。

対象としたのは、名古屋在住の17才から40代半ばの男女、約100名である。^[6]このうち84人から有効な回答を得た。質問の形式は別紙に示した通りである。ただし、時間の関係で全部の動詞についてのデータは得られなかった。

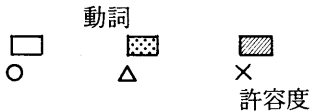
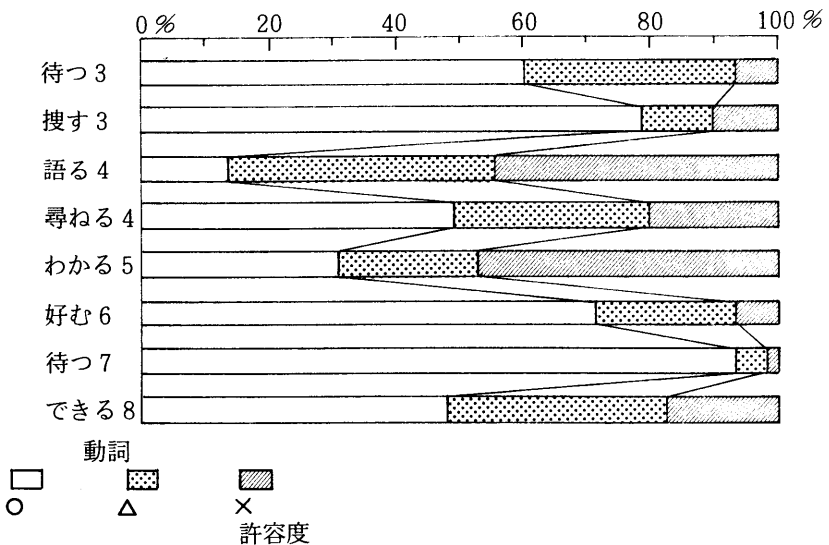
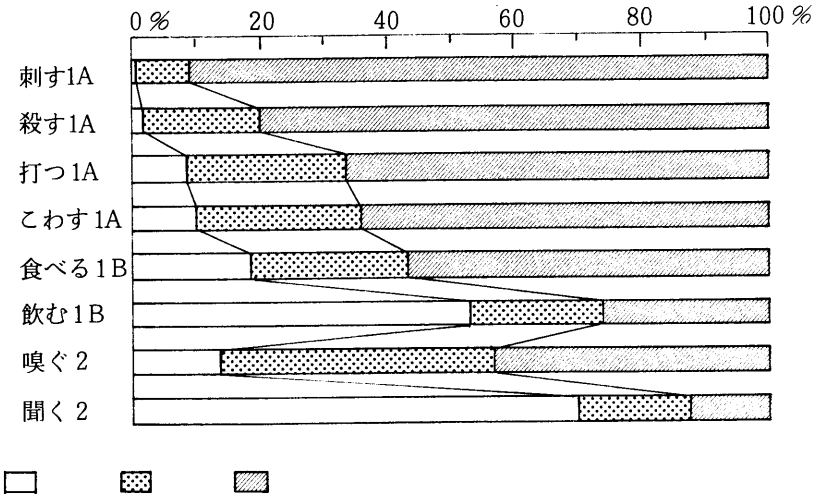
質問は実験者が口頭で読みあげ、それについて被験者が、日本語として自然と

感じる場合には○, 少し不自然だが, だめではない場合には△, 全く不自然に感じる場合には×で答えてもらった。

以下に分析した結果を示す。

表 3

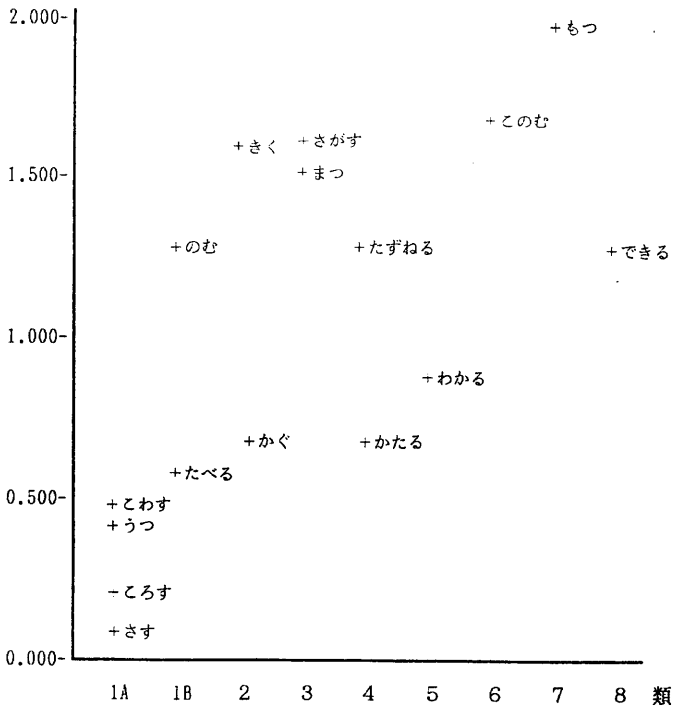
敬語使用意識調査



分析結果から、1 A類の動詞は、全体に許容度は低いと言える。しかし1 B類の動詞では「食べる」と「飲む」は同じ類に属しているが、許容度にはかなりの差がある。その他、「語る」と「尋ねる」のように同じ類に属していても、許容度に差があるものがあるため、このグラフからはそれ以上のことは、言えないところが多い。

そこで、各動詞の「おVだ」「おVである」という形態に対する許容度を、数字にして表すため、○を2点、△を1点、×を0点として平均値を出してみたのが、表4である。

表4



このように見てみると、1 A類とそれ以外では、分布のしかたが全く異なることが分かる。ここで1 A類の動詞を第1種動詞、それ以外の動詞を第2種動詞と呼ぶことにすると、第2種動詞は3類、6類、7類についてかなり高い値を示しており、他の類とは、一見かけはなれているようではあるが、サンプルに用いた動詞が、2つもしくは1つという少数であることを考えると、一概にかけはなれているとは言えない。むしろ、第2種動詞は、全体的には類がおおきくなればなるほど、値が上昇していると見ることができる。少なくとも第1種動詞との間には、かけはなれた相違が見られることは明らかである。

次のセクションでは、この相違を規定している意味的な特徴を見ていくことにする。

2.3. 第1種動詞と第2種動詞の間の相違の意味論的考察

第1種動詞と第2種動詞を分類する基準を考える上で、角田(1985)の1 A動詞と1 B動詞を分類している基準を、もう一度ここで考えてみる必要がある。

角田(1985: 387: 18)において述べられている、その基準とは“Unlike *kill*, *destroy*, etc., verbs such as *hit*, *kick*, etc. do not always imply a change in the patient.”すなわち、1 A動詞においては、常に目的語となったものの状態は変化を蒙るのに対し、1 B動詞においては、常に変化を蒙るとはかぎらない、ということである。

ここで、この「おVだ」「おVである」という敬語形態が、過去時制になりにくいことに注目してみたい。

- (12) ?水谷先生は車を三台お持ちだった。
- (13) ?宮本先生はショパンがお好みだった。
- (14) ?紀子さんは高校時代、英語がよくおできだった。

表4で、許容度の高い動詞についても、過去時制をとると許容度はかなり落ちる。このことから「おVだ」「おVである」は、テンスを持たない超時制であると考えられる。^[7]また、アスペクトについても同様のことがいえる。すなわち、意味的にはこの「おVだ」「おVである」という形態は、「～している」の持って

いるのと同じアスペクトを持つ。つまり、「おVだ」「おVである」は進行相と、結果の状態相の働きをするのである。1 A類の動詞は状態が目的語に必ず及び、「殺す」のように修復不可能な動詞でなくても、何かしらの影響は残ると考えられる。このような目的語となるものに、より強い影響を与える動詞の場合は、動作に主眼が置かれやすい。このことは、角田（1985）が引用している Hopper & Thompson（1980）であげられている10のパラメーターのなかの Aspect と Punctuality とも関係することである^[8]が、次のように結論づけることができる。

1 A類の動詞のように、その動詞の目的語となる項に、より影響が及ぶ場合、動作性、及び点性（punctuality の訳語）が強くなる。したがって、「おVだ」「おVである」のような超時制的形態とは、その動作の行われた時点がぼやけてしまうため、共起しにくいのである。

3. 結論及び今後の課題

角田（1982）および（1985）において提唱された動詞の階層では、ランキングの上の動詞ほど他動性が高く、最も上の動詞、すなわち1 A類の動詞が、最も他動詞らしい他動詞であるとしている。その他動性を規定する、Hopper & Thompson（1980）の10のパラメーターのうちいくつかについて、2.2. で分類した第1種動詞、第2種動詞についてまとめてみると以下のようなになる。

表 5

パラメーター	第1種動詞	第2種動詞
動作性・状態性	動作	動作／状態
アスペクト	telic	telic/atelic ^[9]
点性	点的	非点的
○ ^[10] に対する影響の及ぶ度合い	強（○は常に状態が変化する）	弱（変化するとはかぎらない）

第1種動詞と第2種動詞を、最も決定的に分類するのは、点性と○に対する影響の及ぶ度合いである。2.4. でも述べた通り、「おVだ」「おVである」という

形態の超時制的な特徴に着目すると、このような超時的形態が、動作の起きる時点及び終わる時点に、より注目する動詞とは、相入れないところがあることがわかるのである。

今後は、実験から得られたデータからはこれ以上分類できなかった第2種の動詞を、さらに下位分類し、角田の動詞の階層の下の動詞ほど、超時制の形態と共起しにくいことを検証していく。また、今回は扱えなかった自動詞についてであるが、Hopper & Thompson (1980: 254) でも述べられている通り、自動詞の中にも動作的で、telicで、点的なものもある。実際、自動詞に関して「おVだ」

「おVである」との共起関係は、もっと複雑な問題が絡んでいるようである。これは自動詞性^[1]を規定するパラメーターが規定されていない今日では、大変困難なことであると考えられる。自動詞を他動詞の単なる延長として扱うのではなく、独自の物差しで計り、もう一度、この形態との共起条件を洗い直してみる必要がある。

注

- [1] 「着る」と「切る」は活用の類が異なる。前者は母音語幹、後者は子音語幹である。詳しくは寺村 (1984: 44-48) を参照。
- [2] 母音衝突は、本来、異なる母音が連続した場合にも用いられるが、ここでは狭義の用法として、同一母音の連続と考える。
- [3] 「多くの」と述べた理由は第2章の分析結果を参照のこと。
- [4] 今回の考察の対象を他動詞に限定した理由については、第2章で述べる。
- [5] この規定要因は、他の規定要因ほどは拘束力がない。すなわち「お降りだ」などいくつかの動詞については、この形態を取れる。
- [6] 忙しい時間をさいてアンケートに協力してくださった方々に、ここであらためて感謝の意を示したい。またこの論文の中間発表のとき、貴重なご意見を頂いた方々にも、この場を借りてお礼を言いたい。
- [7] 「おできだった」はやや許容度が高く感じられるが、これは動詞が動作性よりも状態性を表していて、形容詞 (na-adjective) のような働きをするようになったものと考えられる。
- [8] 角田 (1985) では Hopper & Thompson (1980) で提唱された他動性に関する10の意味的パラメーターが、角田の動詞の階層に反映していると、述べている。

の高い位置にあるということである。

- [9] 適当な訳語が見つからないので, Hopper & Thompson (1980) で用いられている用語をそのまま用いる。簡単に説明すると, telic とは, 動作をその動作の終結する時点から見たもの (e. g. Eng. I ate it up.) であるのに対して, atelic とはその意味あいを持たない (e. g. Eng. I am eating it.) もの。
- [10] 他動詞の目的語については, いろいろな用語があてはめられているが, ここでは, Hopper & Thompson (1980) にしたがって, Dixon の用語を用いる。
- [11] この用語は, 名古屋大学大学院文学研究科言語学専攻の清水伸子さんの発案によった。(private communication)

参 考 文 献

- 角田太作 (1982) 「オーストラリア原住民言語」 講座日本語10-外国語との対照 明治書院
- 角田太作 (1985) "Remarks on transitivity" *Journal of Linguistics* 21-2 385-395 Cambridge Univ. Press
- 角田太作 (forthcoming) "Possession Cline in Japanese" in Chappell, H. & McGregor, W. eds. *Body parts in grammar*
- 寺村秀夫 (1984) 日本語のシンタクスと意味Ⅱ くろしお出版
- Hopper, P. J. & Thompson, S. A. (1980) "Transitivity in grammar and discourse" *Language* 56.251-299

(やまだ としひろ 言語 前期課程)

資 料 1

敬語使用に関するアンケート

TOSHIHIRO YAMADA

次の各文は日本語として自然か。

まったく自然に感じる ○

ちょっと不自然に感じる △

まったく不自然 ×

1. () さっきから 校長先生が おまちだ。3
2. () 組長は もう 3人 おころしだ。1
3. () 秋重先生には 英語が よく おわかりだ。5
4. () 石黒先生は 英語が よく おできだ。8
5. () 校長先生が 自分の 青年時代を おかたりだ。4
6. () 落合選手が ホームランを おうちだ。1
7. () 浅井先生が クラシックを おききだ。2
8. () 田中先生が お嫁さんを おさがしだ。3
9. () 高橋先生が お花畑で チューリップの においを おかぎだ。3
10. () 組長は ヘマを やった 組員の 腹を おさしだ。1
11. () 石原先生は たくさん おたべだ。1
12. () 林先生は 成績不信の 理由を おたずねだ。4
13. () 渡辺先生は スポーツの よく できる 生徒が おこのみだ。6
14. () 水谷先生は 車を 3台 おもちだ。7
15. () 本庄先生は いま 庭で 古くなった 犬ごやを おこわしだ。1
16. () 山田先生は 夜な夜な ビールを おのみだ。1
17. () 署長が 犯人を おうちだ。1

ご協力ありがとうございました。